明日への教育

教育改革への発想と提言

蛯谷米司編

社会からの発想

石井公一郎■小島慶三■村井 実■蛯谷米司

日本の教育への提言

A・ベイ■J・コリガン■G・ヒールシャー■U・D・カーン・ユスフザイ■蛯谷米司

霞が関からの発想

ス保田真苗■土居征夫■谷弘一■中川聰七郎■武藤敏郎■蛯谷米司■西村秀俊

教育活性化のために

蛯谷米司

みずうみ書房

蛯谷米司編

明日への教育

教育改革への発想と提言

石井公一郎
小島慶三
村井　実
蛯谷米司
アリフィン・ベイ
ジェームズ・コリガン
ゲプハルト・ヒールシャー
U・D・カーン・ユスフザイ
久保田真苗
土居征夫
谷　弘一
中川聰七郎
武藤敏郎
西村秀俊

みずうみ書房

明日への教育
—教育改革への発想と提言—
昭和五十九年四月二七日　第一刷発行
定　価　一、八〇〇円
編著者代表　蛯谷米司
発行者　坂田秀馬
発行所　株式会社 みずうみ書房
〒101　東京都千代田区神田小川町三-五-三
お茶の水商事ビル
電話　東京(〇三)二九一-七〇二六・七二八四
振替　東京三-四三〇〇〇番
印刷所　図書印刷株式会社

2,500

まえがき

今日のなかに明日を示唆する力を与えるのが教育である。何千年、何万年をかけて、大切に蓄えてきた人類の知恵をもとにして、永遠の未来に通ずる道を教えるのも教育である。

教育なくして今日も明日もあり得ないのであるが、「今日」という雲のような掴みどころのないものは、実際には存在しない。今日と言うかぎりは、必ずそこに生活する人間がいるのである。人間あっての今日であり、明日なのである。

人間は、必ず集団を作り、社会を組織して何らかの生活の様式を共有するようになる。生活に必要なものを交換したり、分担して得意な物を製作したりする。こうした流通活動を育てることによって、技術を生み、科学や経済、さらに社会の組織を整えて、政治という調整の方法を工夫してきたのである。

人間の英知というものが、社会を作り、社会を巧みに生かすように文化を育てて、教育を発達させてきたということである。社会がなければ文化も生まれないし、また教育も必要にはな

らなかったし、また教育が十分に行われなければ、文化も伝達されなかったであろう。もちろん、未知や未来の社会を創造することも期待されないのである。社会・文化・教育は、相互に不可分な関係にあるので、社会・文化の繁栄や多様化の事実は、直ちに教育へはね返ってくる。

しかし、社会や文化の変容に対して、教育の内容や方法が、うまく対応できないときには、人間は現実と教育の隙間に落ち込んで悩まなければならないことになる。

家庭の崩壊とか、学校内暴力とか、あるいは青年の無気力、無節操、無思慮、無感動と言われる現象を生むのも、社会・文化の進化に対する鈍感な教育の在り方に起因する。

これは、一人一人の教師が解決できる問題ではない。文化の事実としての教育の課題であって、社会の次元、あるいは生き物のように、それ自らが変容する力をもつようになった文化の次元に立って考えなければならないことである。

いわゆる教育観の変革を必要とすることなのである。こうしたことについては、アメリカは敏感に反応する。そしてつぎつぎと冒険的な試みをしている。もっとも、そうした試みのすべてが成功しているとは言えないが、社会・文化の変容に、教育を対応させなければならないといった発想と行動の勇気には、見習うべきものがある。

日本とアメリカは、第二次世界大戦の敗者と勝者の関係ではあるが、それ以前から今日まで、太平洋を介して互いに作用し合う間柄であることは、歴史的な事実である。ましてやこれから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宇宙船地球号の同じ乗組員ということになれば、太平洋は、ひとまたぎの溝にすぎないものだと言える。

しかし、日本とアメリカとの間には、なお、アジアの多くの国々とは違う文化の障壁があるように感じられる。それは、文化の深層に潜む宗教や倫理観の違いによるものかも知れない。

アジアの国々には、仏教やヒンズー教などの汎神論が多い。神道も道教もこの汎神論のような考え方である。

中島正樹が指摘（『地球時代の構想力』一九八三年）するように、仏教の中道、儒教の中庸、神道の清浄無心といった相対性のうえに立って、人間の触れ合いを知ろうとし、お互いの理解と協力のなかに日々の生活を営み、歴史を築き上げてきた日本人と、唯一絶対の神への忠誠心を大切にして生活をし、国家を作ってきた西欧・アメリカ人とは、大きな違いがある。お互いの知的な努力がないかぎり、この文化の障壁を越えることはむつかしい。

アジアの汎神論と西欧・アメリカのユダヤ教・キリスト教・イスラム教をはじめとする唯一絶対神の宗教信仰を、どのように文化融合の渦に巻き込んでいくか、さらにそれを越えて、宇宙船地球号を平和と繁栄のコースに導くかといったことが、「明日への教育」のこれからの課題である。

宗教をはじめ、政治の体制や経済の状況、また経済と連動する産業や労働の条件と密接な関

連をもつ科学や技術の様子など、文化の現れは、多種多様ではあるが、文化を発展させる要因となるものは、人類がひとしく求め続けてきた真であり、善であり、美である。

だが、この真・善・美は、決して不変不動の一枚岩として、はじめから存在していたものではない。住むところの自然や、営むところの社会とともに彼らが、嵐をくぐり抜け、障害を越えるうちに発見した知的体系の軸核なのである。歴史の所産であるとともに、時代と社会を通じて、つねに新しい形に変容されていく価値体系だとも言える。

現在から過去を眺め、当面する現実のなかに反省を深め、それらの累積のなかから新しい意味を創造していこうとする核になり、拠点になるのが真・善・美である。それらを現実条件のもとで具体化するのが、教育であるとするならば、文化を異にする者が、お互いの真・善・美、あるいは聖とするものを語り合うことが、教育を研究していく者はもちろん、子供の明るい未来を願うすべての者の、まずなすべきことであろう。

こうした願いを込めたはじめての試みとして、本書の企画がなされたのである。霞が関という官庁文化街に住む皆さんや、ニュース・ジャーナルの世界や経済という巨大な力の世界で活動している皆さん、さらに、風俗・習慣・言語や宗教を異にする在日外国人の皆さんと、熱い想いを込めて語り合って、日本の明日の道を、教育のなかに探索したのである。

討論は、自由奔放で、とても限られたページにまとめることはむつかしいのではないかと心

配していたが、明日の教育を想う「みずうみ書房編集部」の皆さんの熱意と努力によって、まとめあげられたのである。

この「まえがき」の校正ができてきたとき、中央教育審議会教育内容等小委員会の審議過程の報告が公表された。「時代の変化と学校教育の在り方について」「初等中等教育を通ずる教育内容等の基本課題」「初等中等教育における教科構成等の問題」「初等中等教育に係る制度上の問題」などが主要な項目である。

つまり、現行の学校は、時代の流れに適応できなくなっているといった認識のうえに、それをどのように改革すべきかといったものである。

「どのような目的で」「何を・どのように」教育すべきかへの基本的な提案だとも考えられる。教育は、人類の現在・未来にかかわる大問題である。こうした重要な課題に当面して、国民の誰もが教育について考え、そして、語るべきだと思う。

本書をきっかけにして、日本の教育、世界の教育が茶の間の話題になればと念じている。

昭和五十九年二月

編著者代表　蛯谷米司

目次

まえがき　蛯谷米司　I

第一章　社会からの発想　1

石井公一郎／小島慶三／村井　実／蛯谷米司

1　企業からの批判と要請　3
- ●生半可な民主主義のマイナス面　3
- ●日本産業の国際的展開　6
- ●人材を育てるための実験校を　12
- ●途上国における二つの問題　14
- ●企業の教養集団化へ　17
- ●産学協同案を進める　19
- ●ファンダメンタルただ乗り論からの脱皮　20

2　戦後教育の問題点　23
- ●生涯教育の観点から　23

●画一化をどうするか……26
●幼稚性と要領の良さ……33
●ゼミナール形式を生かす……36
●教育の方法……40
●知識の階層構造は手段の一つ……41
3 国際理解をどうすすめるか……45
●人間形成が国際化の要件……45
●国際化と教育の在り方……48
●現実に適応した教育とは……52
●学問のイメージ……56

第二章 日本の教育への提言

アリフィン・ベイ／ジェームズ・コリガン／ゲプハルト・ヒールシャー／U・D・カーン・ユスフザイ／蛯谷米司

61
1 教育の核心……63
●人間のあるべき姿をどうつくるか……64
●進歩のための自由……66

●宗教の役割……68
●宗教と自由……71
●ロバは人間になれたか……72
2 日本文化と教育……75
●墨供養と仏性……77
●絶対主義より共存主義の日本……78
●福沢諭吉、吉田松陰の教育論……82
3 自由と教育……84
●自由の誤った解釈……85
●価値体系は何によってつくられるか……88
●偏見と多様なものの見方……91
4 文化の多様性への理解……95
●自由の本当の意味……95
●法律の中の自由……99
●教育の国際性……101
●学校任せの教育ではダメ……104
●グローバリゼーションの課題……110

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

●適格者主義か希望者主義か……161
●命を育てる教育を……163
●総合制高校の実現は可能か……165
●カリキュラムの見直しと教育テクニック……166
●大学の社会的序列化を解決するために——教授のスカウト合戦を——……168

4 今の大学は教育機関としての機能を果たしているか……169
●財政の立場から見た進学率……171
●教育は動機づけが基本……178
●教育クーポン制度は可能か……181
●教育に使われる国民的費用は限界にきている……184
●文部省のアキレス腱……188

5 教育行政を問い直す……191
●教員養成のプロセスとして実社会生活の経験を……192
●不毛の政治的対立をどう解決するか……197
●教科書がすべてではない……201
●教師でなければできないことは……204
●女性教師の比率は国際的には低い……207
●幼稚園と保育所の一元化……211

第三章　霞が関からの発想

久保田真苗／土居征夫／谷　弘一／中川聡七郎
武藤敏郎／蛯谷米司／西村秀俊

1　日本の教育をどう捉えるか……115
●国民の半分は女性であることを忘れずに……117
●主体性・創造性・国際性を育てる教育が必要……122
●教育の配給制度を何とかできないか……126
●普商工農と言われる高校の序列があっていいか……130
●今後の教育の方向性なしで予算だけはふくらむ……133
2　みんなが「人並み」を目指す画一性に問題はないか……140
●先端技術から遊びまで輸入に頼るのは心細い……142
●海外子女教育問題は教育の本質……148
●画一化の実態……152
●基本的には教師も校長もなるべく自由にする方向へ……154
●学校や地域で大胆な教育法の実験を……157
3　受験体制を支えるもの……160

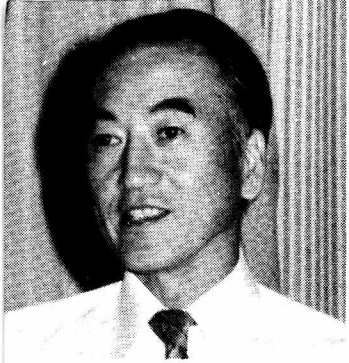
6 創造する力はどうしたら育つか……215
●肝心なのは創造性を認めるシステムがあること……215
●創造性の本質は遊びやゆとりにつながる……220
●戦後の生活パターンと受験戦争……223
●異端に対する弾力性をもったシステムを……226
●柔構造の教育体制をつくる……230
●外国語教育をどう発展させるか……232

第四章　教育活性化のために　237

蛯谷米司

1 人間と文化・教育……238
2 学校とは何か……243
3 経済は現実である……246
4 教育の転換点……255
5 教育の計画性・カリキュラム……262
6 教育の内容としての文化と目的としての創造力……269
7 二十一世紀を望む日本の教育……277

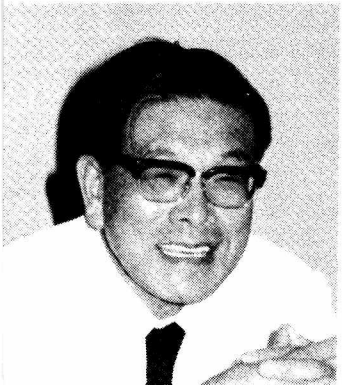
第一章　社会からの発想



石井氏

小島氏

村井氏



蛯谷氏

ブリヂストンサイクル㈱社長　石井公一郎

芙蓉石油開発㈱社長　小島慶三

慶応義塾大学教授　村井　実

司会　福山大学教授　蛯谷米司

小島慶三（こじま　けいぞう）
大正６年，埼玉県生まれ。
昭和15年，東京商科大学卒業。
同年，企画院入省。28年，通産大臣官房調査課長。37年，日銀政策委員。38年，日本精工㈱入社，取締役。45年，専務取締役。48年，芙蓉石油開発㈱副社長。53年，社長。36年より上智大学で講師(経済政策)。51年より名古屋大学で講師(資源経済論)。現在，一橋大学商学部講師。著書に「人間復興の経済学」「日本からの黒船」「ヒューマノミックスの世界」などがある。

蛯谷米司（えびたに　よねじ）
大正６年，北海道生まれ。
昭和22年，広島文理科大学理学部卒業。
同年，広島大学理学部助教授。
33年，文部省教科書調査官。
34年，文部省教科調査官。
43年，広島大学教育学部教授。
56年，福山大学教授。現在，人間科学教育センター長兼務。理学博士。医学博士。
主な著書に「教科教育学概論」「形象との対話への提言」(上･下)「幼児自然教育法」(理論編・実践編）などがある。

石井公一郎（いしい　こういちろう）
大正12年，東京生まれ。
昭和21年，慶応義塾大学経済学部卒業。
同年，ブリヂストンタイヤ㈱入社。43年，取締役，海外本部長。45年，常務取締役，海外担当。49年，専務取締役，タイヤ営業担当。54年，ブリヂストンサイクル㈱社長，ブリヂストンタイヤ㈱取締役兼任。
経済同友会の教育問題委員会委員長として種々のシンポジウムに参加，また，企業の部・課長クラスの人たちの考えを数多く聞いている。

村井　実（むらい　みのる）
大正11年，佐賀県生まれ。
昭和19年，広島文理科大学教育学科卒業。
現在，慶応義塾大学文学部教授。
専門は教育学，教育史。
主な著書に「教師ソクラテスの研究」「ソクラテスの思想と教育」「かにの本」「ありの本」「道徳は教えられるか」「人間の権利」「教育の再興」「原典による教育学の歩み」「教育学入門」(上・下)「ソクラテス」(上・下)「現代日本の教育」「新・教育学のすすめ」などがある。

1 企業からの批判と要請

司会（蛯谷） 日本の現状は、よく危機と言われていますが、経済界あるいは科学技術、そういう分野にわたっての分析を聞かしていただきたいと思うのです。実際そういう問題が一番顕著にでてきたのは、昭和四十七、八年ごろのいわゆる石油ショックを乗りきったあとこういうふうに言われたりしておりますね。そういう面からでも日本の問題はいろいろあると思うんですが、石井さん、いかがでしょう。

●生半可な民主主義のマイナス面

石井 第一次オイルショックを非常に上手に乗り切ったと世上にいわれているけれども、一旦デフレに落ち込ませて、堅実に行くべきだったと思われますね。それを国債の呼び水で適当にごまかしの前進を続けてきたので人、物、金がつきすぎて、産業のどのセグメントをとっても贅肉だらけです。国の財政は国債増発で破綻するという事態ですね。先進資本主義国の悪い面を十分日本も吸い込んで、戦後教育の偏向とも関連してこんなふうになった。福祉国家の幻想とか、受益者負担反対とか、そういうような精神構造の中に破綻を呼び込んで来ているわけです。

これから先は今までの大きなつけがまわってくるから、相当激しくなりますね。それにうちかって来世紀へ向かって日本を構築していくというのは大変むずかしい課題になっています。イデオロギー的にも先進諸国共通の倒壊現象がある。来世紀へ向かっての社会科

石油危機

一九七三年一〇月六日の第四次中東戦争の勃発は、アラブ産油諸国の石油戦略としての原油の輸出制限と原油価格の大幅値上げをもたらし、世界経済に大きな影響を与えた。これを第一次石油危機という。

この危機を世界各国がなんとか乗り切ったかに見えたが、七九年のイラン革命、翌八〇年のイラン・イラク戦争による第二次石油危機が世界の経済界を襲った。

この再度にわたる石油危機こそ、世界経済をインフレと景気後退の渦の中にまきこんだ元凶であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com